

奈良時代の井戸から出土した土師器甕の頸部に付着した紐に関する所見

1 はじめに

「我が持てる 三相に纏れる 糸もちて 付けてましもの 今ぞ悔しき」(『万葉集』第516) 阿倍女郎と中臣東人が恋のかけひきをした相聞歌の一部である。詠手の阿倍女郎は、切れにくい丈夫な糸として、「三相に纏れる糸」という言葉を使っている。

律令期には、土師器の甕や須恵器の壺瓶類の頸部に、紐が巻かれた状態で出土する例が知られている。とくに井戸から出土することが多いため、これらの中には、釣瓶として用いられたものも含まれる可能性が指摘されていた¹⁾。

2014年度におこなった奈良文化財研究所本庁舎地区の井戸SE3242からも、頸部に紐を巻き付けた土師器甕が出土した。頸部を覆う粘質土を取ると紐がばらけてしまうため、原位置での記録を最優先し、年輪年代測定に用いるマイクロフォーカスX線CT装置を使って、粘土によってパックされたままの状態、紐を撮影した(図86)。その結果、この紐が3本を時計回りに撚りあわせた三つ打ちの構造であることがあきらかとなった。また、1本の径が約1.5mmであることから、おそらく植物性の蔓や麻紐が素材であろうと推測された。

本研究では、土師器甕の頸部に巻かれた紐の構造について解明し、土師器甕の付属品としての三つ打ち紐について若干の考察を加えたい。

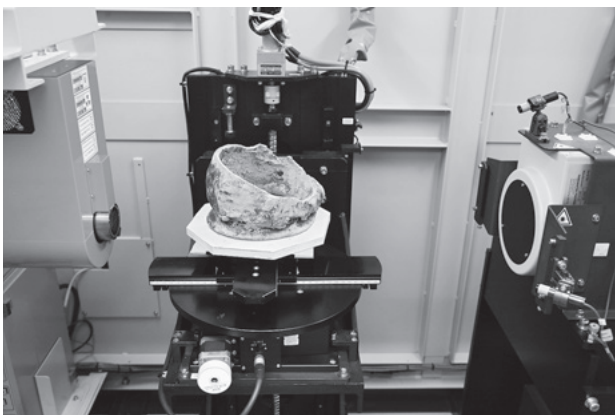


図86 マイクロフォーカスX線CT撮像状況

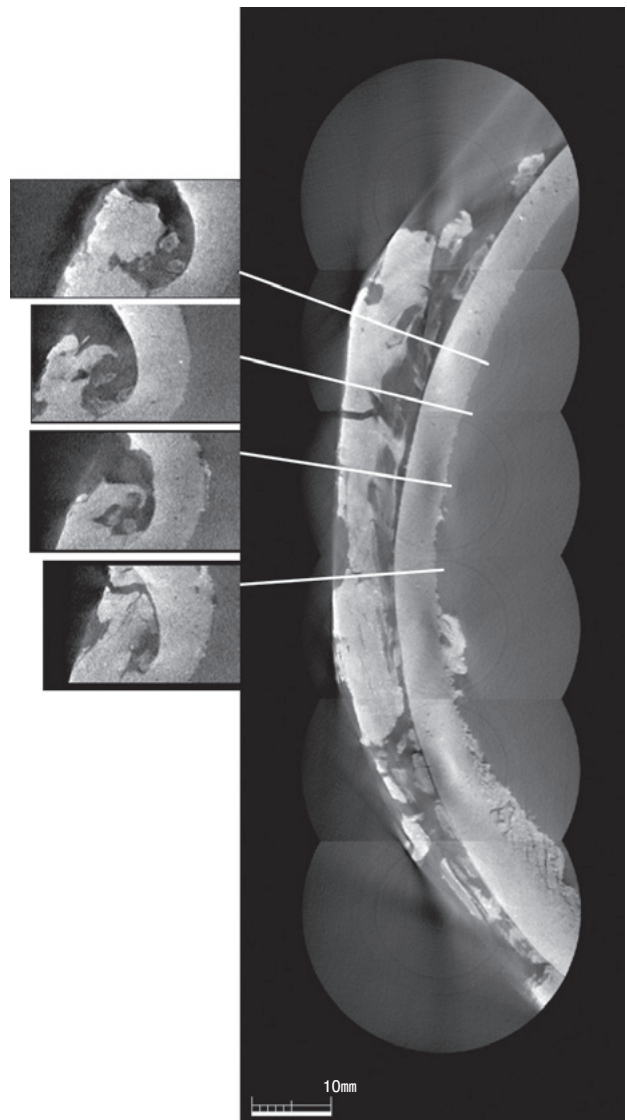


図87 井戸SE3242出土土師器甕の頸部横断面および各所の縦断面

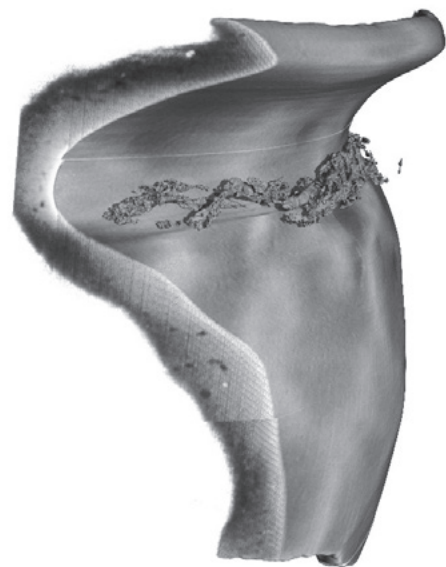


図88 井戸SE3242出土土師器甕に三つ打ち紐が巻かれた状態の立体表示

2 調査方法

調査に際しては、奈良文化財研究所のマイクロフォーカスX線CT装置(島津製作所 SMX-100CT-D)を用いて、撮像対象の土師器甕に粘土質の付着したままの状態でおこなった(図86)。撮像条件は、管電圧:100kV、管電流:100 μ Aで、1回あたりの撮像範囲を視野直径:約35mm、高さ:約12mmの立体撮影とし、オーバーラップを設けながら6回撮影することで、頸部にそって約10cmの範囲を可視化した(図87)。

3 紐の構造

図87は、紐の巻かれた土師器甕頸部の横断面を右側に、白線で示した4ヵ所の縦断面を左側に図示したものである。これによると、粘土質と土師器甕との間に、3本の円形ないし扁平な形状の繊維が、手前に来るほど時計(右)回りの回転をともなって、土師器甕頸部に一卷きで巡らされていることがわかる。現代の「三つ打ちロープ」の捻りでは、手前に来るほど左に回転する「Z捻り」、右に回転する「S捻り」に分類され、現在では「Z捻り」が主流とされている。今回扱った土師器甕頸部に巻かれた三つ打ち紐の捻り方は、それとは逆向きの「S捻り」であった。

三つ打ち紐を構成する繊維1本あたりの寸法は、正円を形成している所で直径が約1.5mm、3本捻りあわさった状態で、外接円直径が約3.5~5mmであった。捻りのピッチは、約40mmで3本の位置関係が互いに元の位置に戻るといふ、比較的緩やかものである。

土師器甕頸部に三つ打ち紐が巻かれた状態について、マイクロフォーカスX線CT三次元画像から粘土質などの紐以外の要素を一旦除去した上で、当該土師器甕の同じ部分を広範囲にわたってマイクロフォーカスX線CT撮像した画像を組みあわせ、重ねあわせて立体的に表示したのが図88である。

4 出土遺構と類例

奈文研本庁舎地区の発掘調査(平城第530次)において釣紐を残す土師器が出土した井戸SE3242は、平城京右京一条二坊四坪内でみつかった一辺80cm程度の縦板組の井戸である。規模は大きくないが、役所に掲げる役人の

名前を列記した歴名簡が出土したことで注目を集めた(『紀要2016』)。帰属時期は、遺構の重複関係や、歴名簡が転用されていることなどから、平城京遷都からやや時間があってから、開削されたと解釈している。井戸の中から出土した土器の年代から、奈良時代の後半に埋没したとみられる。

土師器甕は胴部の中ほどで割れており、井戸底近くの近接する場所で上半分と下半分が見つかった。大和型の土師器甕で、土製の把手はつかない(図90-2)。外面には煤がべったりつき、内面にも厚くおこげが残る(図91)ため、一定期間、煮炊具として使用されたものであることはあきらかである。

これとよく似た例が、『平城報告IV』で報告されている。図90-1は大膳職推定地の井戸SE311Aから見つかったもので、今から約半世紀前の1968年、平城第7次調査で発見された(図89)。報告書では、写真のみ掲載されていたが、実測図は載せられていなかった。出土後、紐の出土状況の保存を試みたのであろう、樹脂に固められた状態で保管されていた。完全な状態での保存とは言い難いが、紐の構造をかるうじて知ることができる。

紐はやはり直径1.5mm程度の紐を3本、時計回りに回転させる「S捻り」であることがわかる。素材は蔓性植物の蔓であろう。さらにSE311A例を、よく観察してみると、頸部の対向位置に2ヵ所、結び目があり、それらを上で、もう一度結んでいるようにみえる。



図89 SE311Aの土師器甕出土状況

5 まとめ

文頭で、『万葉集』収録の相聞歌の一部を引用し「三相に縊れる糸」が、奈良時代に切れない絆の比喩であることを紹介したが、現代でも、「三つ打ちロープ」といえば、山岳登山や救難救助の現場などで、もっとも頼りになる荷重に対して強いロープの代名詞でもある。

この「三つ打ちロープ」と同じ構造の三つ打ち紐が土師器甕の頸部に巻かれていたことは、土師器甕あるいはその内容物に対して、何らかの荷重が掛かるような条件で使用されていたことが強く示唆される。

土師器甕は基本的に煮炊具として利用されたと考えられており、内容物は液体であると考えるのが妥当であろう。口径20cm程度の甕に、8割程度まで液体を入れた場合でも、相応の重量であったと予想される。

土師器甕の作り方は、体部と口縁部で粘土を接合するのが一般的であることを考慮すると、中に液体を入れた状態で、口縁部を持って持ち上げるのは、破損するリスクをとまうであろう。実際に、土師器甕は口縁部と体部の境で割れて出土しているものも多い。

頸部に紐をかける理由としては、把手かわりに携行しやすくしたと考えられよう。SE311Aから見つかった土師器は、報告者の坪井清足によって、把手付甕とキャプションが付けられていた。土師器甕の把手として理解していたようである。

これらが井戸から水を汲みあげるための釣瓶である可能性については、少なくともSE3242例は否定的な要素が挙げられる。土師器甕の内面には厚くおこげが残る状態で釣瓶に転用したとは考えにくいであろう。では、逆に頸部に三つ打ちの紐を掛けた状態で、煮炊きに使用したのであるか。その場合は、紐の耐火温度も気になるところである。

いずれにせよ、本稿においては、用途について明言することはできないが、池田裕英氏も指摘するように、土師器甕や須恵器壺瓶類などの頸部を洗う際には、こういった植物遺体が残っていないのか、注意を払う必要がある。場合によっては、X線CT装置による分析を通して、原位置の記録保存ができる場合もある。こういった事例の積み重ねが、土器の使用実態に迫る基礎的データになることは、言うまでもない。 (神野 恵)

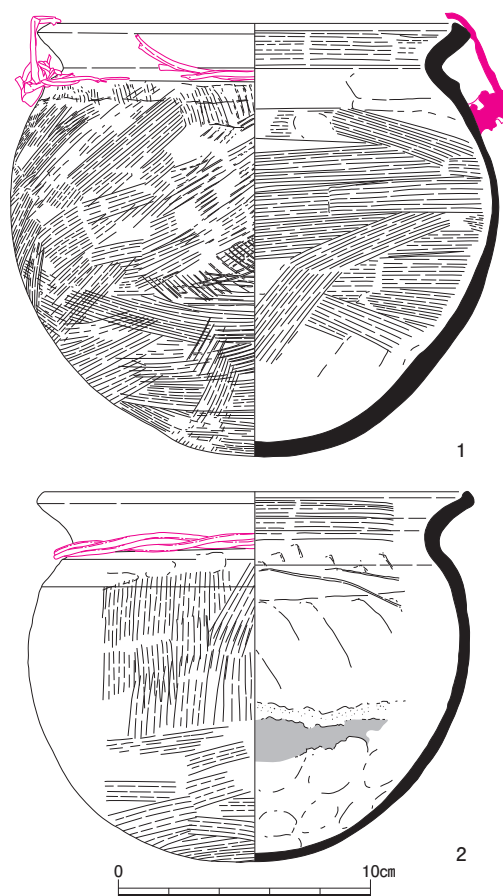


図90 紐の付いた土師器甕 1:3
1. SE311A出土 2. SE3242出土



図91 SE3242出土土師器甕の内部側面のおこげ

謝辞

図88の作成にあたっては、(株)島津製作所の大河内宏和氏はじめ同社の関係者のご協力をいただきました。ここに謝意を表します

註

1) 池田裕英「釣瓶考」『森郁夫先生還暦記念論文集 瓦衣千年』1990。